

【年間テーマ 意識をかえて教育する】

平成 31 年 2 月 19 日提出

日付	平成 31 年 2 月 9 日(土)			
場所	天神福岡ビル		記録者名: 遠藤由郁	
出席者 (敬称略)	丸山病院	水戸病院	福岡和仁会病院	永野病院
	諸岡 良平	田仲 省子	(発表)林 悦子	相川 弘子
	福岡みらい病院	北九州津屋崎病院	東福岡病院 (0940-43-1311)	
	鹿毛 克子	西原 奈美	(書記) 遠藤 由郁 【連絡係】	
テーマ	4月からのまとめ・発表			

【まとめ】

模造紙に各自が用意した物を貼り、発表者と読み合わせを行い、最終決定を確認する

【発表内容】

私たち教育1グループは「意識を変えて教育する」という年間テーマのもとに話し合いを進めてきました。身体拘束は「認知症高齢者の意思決定権を侵害する行為であり高齢者虐待に該当する」とされています。ミトンや安全ベルト、コールマットなど『身体拘束』と考えられるものに関係して「してはいけないこと」と分かってはいるものの多忙・人手不足といった環境の中でやむを得ず使用しているはずだった身体拘束が(多忙・人手不足といった)環境に慣れることにより無意識になってしまい、身体拘束を行っていることにも慣れてしまっているという現状もあります。

そこで身体拘束に対する意識調査を行うため、それぞれの職場スタッフにアンケートを行いました。その内容がこちらです。(別紙あり)

この結果の中で私たちが特に注目した項目が①の「身体拘束は原則高齢者虐待へ該当すると思う」という質問の回答で「いいえ」と答えたスタッフがアンケート実施者総数の 87/215 (40.4%)という結果でした。

内容をみても「ケガをしったり生命の危険がある場合の短時間での使用は仕方がない・医療を行うためには仕方がない」などといった理由で、しないほうがいと分かってはいるがやむを得ない場合もあるので虐待には当たらないという認識のスタッフが大多数を占めていることがわかりました。

実際、現場で働いていると『安全を守るため』といった理由で身体拘束を行わざるを得ない状況に直面する事も事実です。しかし、経管栄養の注入が終わった後もミトンを付けっぱなしにしていたり、誰かが見守れる環境にありながら安全ベルトを付けたままにしまったり、「安全を守るため」の必要最小限の使用を基に開始した拘束が、気が付けば医療者の業務を優先させるために(例 何回もFDチューブを入れると手間がかかる ベルトをしておけば安心 等)汎用化されてしまっている現状がこのアンケート結果からみえた身体拘束に対する認識の甘さからくるものではないかと考えました。

この現状に対し教育する私たちはどうしていけばいいのか…色々検討してたどり着いたのは私たちが正しいとされることを言い続け、スタッフの意識を少しずつでも変えていき職場全体としての風土づくりをしていかなければならないということです。

何度同じことを言っても聞き入れてもらえなかったり、注意や指導をする人が大体決まっていたり「言ってもどうせわかってももらえないし…」と思うこともあります。諦めずに言い続けていくことが「ダメなものはダメなんだ…」と認識することに繋がり、認識できた人が増えていくと全体の意識が高まりよりよい風土が作られその結果、患者さまにより良いケアの提供ができるということに繋がります。そのためにはまづ職場の雰囲気をよくしなければなりません。

私たちの仕事は「協力・コミュニケーション」は絶対的に必要で、これがうまくとれていないといけないと何事もスムーズには進んでいきません。この「協力・コミュニケーション」を最大限に発揮できる環境が作れば患者様にとってもさらに質の高いケアが提供できることとなります。そのためにも教育する立場の私たちももう一度自分自身の教育の仕方を振り返り、指導する時の雰囲気作りや言葉遣いを意識しながら指導にあたらなければならないと思いました。

【年間テーマ 意識をかえて教育する】

指導する側・受ける側それぞれが少しずつ意識をかえていければ全体として変化はかなり大きなものになると思います。その変化は患者様やご家族に質の高いケアを提供できるということだけでなく、働く私たちにとっても良い環境の中でやりがいを感じながら仕事ができるということに繋がってくるのではないかと思います。1年間このグループで話合ってきたことを基に、それぞれの職場で「意識を変えて教育する」ことを実践していきたいと思います。

【感想】

- 西原奈美→ 身体拘束をしている事に 疑問を持ち続ける気持ちを忘れずにいようと思います。
- 諸岡良平→ 他病院の方々とディスカッションする事で色々勉強になりました。
又介護の私にとって看護師の方々と研修は、お互いに協力出来る事は無いかと特に考えるようになり、その結果、患者さんにしっかり還元していきたいと特に思いました。
- 相川弘子→ はじめて参加して、他病院の方と知り合うことが出来て凄く勉強になりました。
今の職場が以前の様に、介護さんと協力して仕事が出来たら良いのですが、パートが多くて、社員の文句も多く、どうにか出来ないのか悩んでいる感じでした。
今回の話で、協力が無いと、患者さんにいいケアを提供することが出来ないなど話していき、いいケアを提供して行きたいと思います。
- 鹿毛克子→ 他病院の方々とこれだけ長い期間同じテーマで話をするとする経験は初めてで勉強になりました。
今回の学びを職場で活かすために、職場のスタッフと密にコミュニケーションをとり環境と意識を変えていけるよう努力したいと思いました。
- 林悦子→ 「ダメなものダメ」と言い続ける存在が居ないと現場はどんどん医療者の気持ちしか考えられない人材が増えていくのではと思うので、研修会に参加した私達がそういう役割を担っていかなければと思います。
- 田仲省子→ 今回の研修を通して、患者さん第一を考え、安全、安楽で質の高い看護を提供できるよう、初心に返りながら、自分自身も振り返る事が出来ました。
又スタッフ間とのコミュニケーションも大事にしながら日々声かけし、いい事、ダメな事をきちんと伝えていく大切さを学びました。
それぞれ違う環境の中 沢山の事を学び振り返る事ができ良かったです。
- 遠藤由郁→ 今回久しぶりの ケア質の会の参加でした。毎回情報交換が出来て有意義な研修になりました。身体拘束は原則「ダメ」という事を再認識し、リーダーとなる私たちが「なぜ ダメなのか？」を言い続けて行かないといけないと思います。

4/27 ケア質の会の研究発表の連絡係
よろしくお願いたします。

東福岡病院 遠藤 由郁 ☎0940-43-1311

抑制廃止とケアの質を高める会 事務局
E-メールアドレス info@fukuokakenryo.jp
(FAX.092-691-3961)